

千葉市中原窯跡確認調査報告書

平成元年度

財団法人 千葉県文化財センター

なかはら
千葉市中原窯跡確認調査報告書

平成元年度

財団法人 千葉県文化財センター

序

千葉県には2万か所にのぼる多数の遺跡が所在していますが、その中で古代の窯業遺跡は35か所確認されています。これらの遺跡は、古代における生産技術と流通経済の実態を明らかにし、地域の歴史、文化を解明する上で貴重なものです。学術的調査により規模、構造、年代等の把握された例は数少ないのが実情です。

このため、千葉県教育委員会では昭和62年度から国庫補助を受けて、窯業遺跡、中でも実態解明の遅れている須恵器窯跡のうち、重要性が高く、かつ開発等の影響を受けるおそれのあるものについて、今後の保護、活用のための資料を得る目的で、測量及び確認調査を実施し、その実態を明らかにしてきました。

今年度は、千葉市に所在する中原窯跡の調査を実施しました。その結果、窯跡2基の存在が確認され、多数の須恵器が出土したことから、今後周辺の集落遺跡の出土資料との対比によって、生産と供給の実態の解明が可能になるという、大きな成果が得られました。

このたび、その成果を報告書として刊行する運びとなりましたが、本書が学術的資料として、また文化財の保護、活用のための資料として、広く一般の方々にも利用されることを願ってやみません。

終わりに、文化庁を始め、千葉市教育委員会、財団法人千葉県文化財センター、土地所有者を始めとする地元の皆様に心からお礼申し上げます。

平成2年3月31日

千葉県教育庁文化課長 福田 誠

例　　言

1. 本書は、千葉市金親町字中原754ほかに所在する中原窯跡の確認調査報告書である。
2. 本事業は、千葉県教育委員会が国庫補助を受けて行っている窯業遺跡確認調査の第3年次であり、調査は財団法人千葉県文化財センターに委託して実施した。
3. 調査は、平成元年10月3日から同年10月31日まで実施した。
4. 調査は、財団法人千葉県文化財センター研究部において、部長堀部昭夫、部長補佐渡辺智信の指導のもとに、主任技師関口達彦が担当した。
5. 本書の原稿執筆は関口達彦が行った。
6. 調査に当たっては、所有地の発掘を快く御承諾くださった鈴木亮一氏から多くの御協力をいただいた。また、金親町自治会長石井巖氏からは様々な便宜を図っていただき、千葉信用金庫からはマイクロバスの駐車場を提供していただくなど多くの御協力をいただいた。ここに記して感謝の意を表するものである。
7. 現地調査から報告書執筆に至るまで、千葉市教育委員会の関係者各位を始め多くの方々から御教示、御指導をいただいた。ここに記して感謝の意を表するものである。
8. 本書の挿図の表現等は下記のとおりである。

(1) 縮尺　窯跡・灰原　1/60

土器　1/4　　瓦　1/6　その他1/2

(2) 土器実測図のうち、断面白ぬきは土師器、黒塗りは須恵器を表す。

(3) スクリーントーンの指示は挿図に示す。

(4) 方位は座標北を示す。

9. 土器の分類は以下のとおりである。

杯… I群土器　還元焰焼成された灰色を呈する須恵器。

II群土器　いわゆる「くすべ焼成」された須恵器で、黒色を呈する。

III群土器　いわゆる「土師質須恵器」と呼ばれている須恵器で、灰褐色を呈する。

要　　凡例4



10. 本書では、国土地理院発行の1/25,000地図（千葉東）を利用した。

11. 中原窯跡の遺跡コードは、201-088である。

目 次

序	
例 言	
I 序 章	7
1. 遺跡の位置と環境	7
2. 中原窯跡の調査歴と研究史	7
II 調査の概要	10
1. 調査方法	10
2. 調査の経過	13
III 検出された遺構と遺物	14
1. 1号窯跡	14
2. 2号窯跡	16
3. 第10トレンチ灰原	20
4. 各トレンチの出土遺物	26
5. 遺物集中地点	30
IV まとめ	33
1. 窯跡について	33
2. 出土遺物について	35
3. 供給関係について	36
4. 結語	37

表 目 次

第1表 土器観察表	39
-----------	----

挿 図 目 次

第1図 中原窯跡の位置と周辺の主な遺跡	8
第2図 確認トレンチ配置図	11・12

第3図	1号窯跡実測図	15
第4図	1号窯跡出土遺物実測図	16
第5図	2号窯跡実測図	17
第6図	2号窯跡灰原実測図	18
第7図	2号窯跡出土遺物実測図	19
第8図	第10トレンチ・灰原A実測図	20
第9図	羽釜・鋸片実測図	20
第10図	紡錘車実測図	20
第11図	第10トレンチ・灰原A出土遺物実測図（1）	21
第12図	第10トレンチ・灰原A出土遺物実測図（2）	22
第13図	第10トレンチ・灰原B出土遺物実測図（1）	23
第14図	第10トレンチ・灰原B出土遺物実測図（2）	24
第15図	第10トレンチ・灰原出土瓦拓影及び実測図	25
第16図	各トレンチ出土遺物実測図（1）	27
第17図	各トレンチ出土遺物実測図（2）	28
第18図	各遺構出土遺物拓影図	28
第19図	各トレンチ出土瓦拓影及び実測図	29
第20図	第15トレンチ・セクション図	30
第21図	第15トレンチ出土遺物実測図	31
第22図	第15トレンチ出土瓦拓影及び実測図	32
第23図	中原窯跡製品の供給	36

巻末折込み 中原窯跡周辺地形図

図 版 目 次

- 図版1 中原窯跡と周辺の航空写真
- 図版2
 - 1. 調査前近景（西から）
 - 2. 調査前近景（西から）
 - 3. 調査前近景（南から）
- 図版3
 - 1. 1号窯跡窯尻（東から）
 - 2. 1号窯跡セクション（西から）

3. 1号窯跡焚口付近（西から）

図版4 1. 2号窯跡（西から）

2. 2号窯跡窯体（西から）

3. 2号窯跡遺物出土状況（南西から）

4. 2号窯跡遺物出土状況（南西から）

図版5 1. 第10トレンチ灰原A遺物出土状況（南から）

2. 第12トレンチ（西から）

3. 第15トレンチ遺物出土状況（西から）

図版6 出土遺物

図版7 出土遺物

図版8 出土遺物

図版9 出土遺物

図版10 出土遺物

I 序 章

1. 遺跡の位置と環境

中原窯跡は、千葉市金親町字中原754番地に所在する。旧下総国では千葉郡に属する。

遺跡の位置する千葉市は、千葉県北西部の東京湾に面する県庁所在地で、内陸部には下総台地が広がり、東京湾、利根川、九十九里方面へ流入する大小河川によって浸食され、沖積低地を形成している。

遺跡は、千葉市の中央部から東へ10km入りこんだ下総台地上に位置する。このあたりは四街道台地とよばれ、鹿島川以西、都川以北の地域に広がり、標高は30m～40mで台地面は平坦で広く、利根川水系の鹿島川と東京湾に注ぐ都川によって開拓されている。鹿島川は、千葉市土気町に発し、下総台地西部では最大の流域と長さをもち、印旛沼に流れ込んでいる。谷密度は大きくななく、傾斜も8°以上15°未満である。

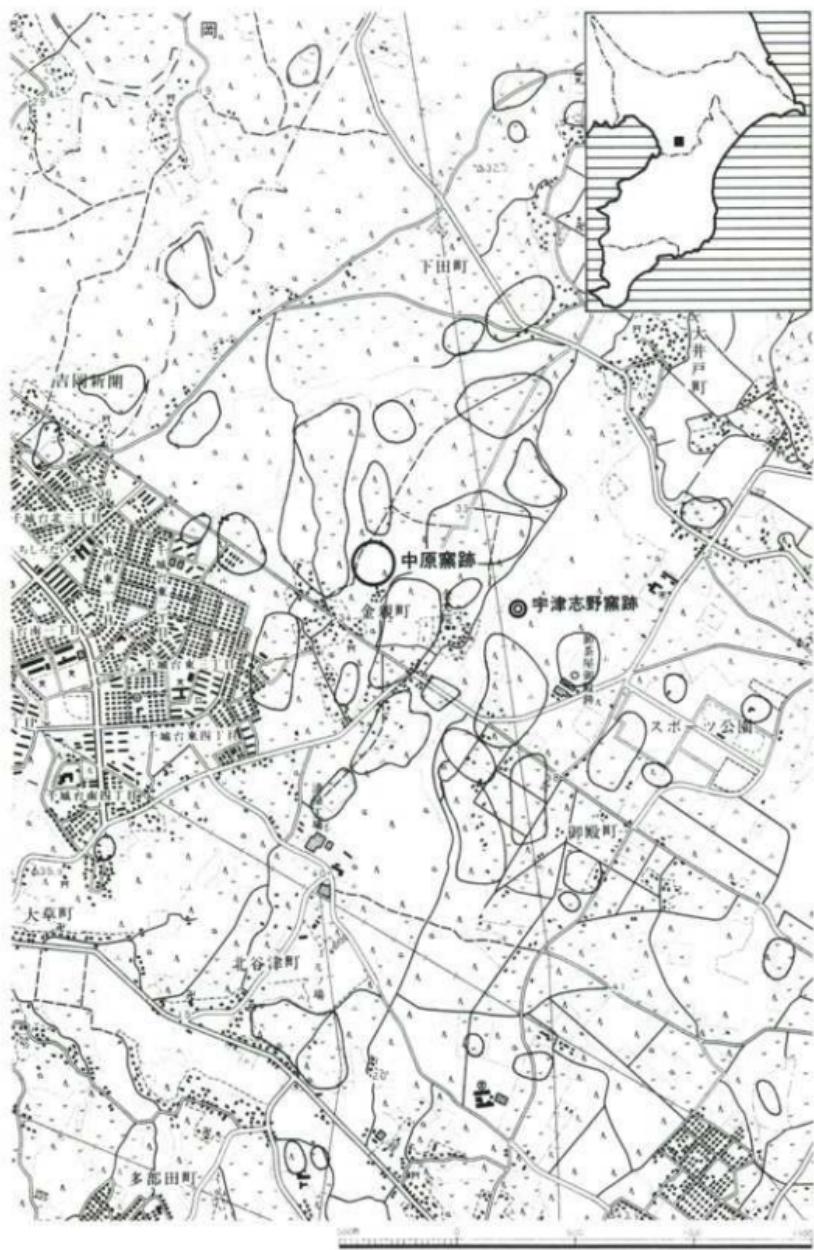
中原窯跡は、この鹿島川の本流から西側へ入り込んだ支谷が、さらに南へのびて形成された小支谷の最奥部で、谷津に西面する標高35mの台地緩斜面上に占地し、低地との比高差は10mを測る。台地の表土層は、黒ボク土壤で構成され、杉の植林の適した土地であることが知られている。

県内の窯業遺跡の多くは台地斜面部に立地しているが、このような窯跡の周辺には材料となる粘土層が分布していることが知られている。地質的にみると、下位から下総層群の清川層・上岩橋層・木下層・常総粘土層と累層区分され、その上部には武藏野ローム層・立川ローム層が堆積している。粘土は、このうち木下層中の粘土層・常総粘土層から採取されていたと考えられる（宇津川 1983）。

周辺には踏査の結果、多くの遺跡の存在が判明しているが、調査されている遺跡は少ない。そのなかで中原窯跡と特に密接に関係するのは宇津志野窯跡である（第1図）。この窯跡は、千葉市更科町に所在し、鹿島川に開拓された小支谷の左岸で、中原窯跡とは台地を一つ隔てて直線距離でわずかに0.7kmの位置にある。発掘調査は行われていないが、採集した資料から中原窯跡よりはやや後出の9世紀中頃～後半の操業時期が考えられている（倉田 1987）。第1図には分布地図（千葉県教育委員会 1986）から、主に奈良・平安時代の遺物を出土する遺跡の範囲を示したが、大規模な集落遺跡となる可能性のある遺跡もあり、調査がすすむにつれ、中原窯跡・宇津志野窯跡を成立させたこの地域の様相も次第に明らかになっていくであろう。

2. 中原窯跡の調査歴と研究史

中原窯跡について初めて紹介し検討を加えたのは、倉田義広氏である（倉田 1983）。それによると中原窯跡は、市内分布地図作成中の昭和49年頃「武田宗久氏より金親町周辺に布目瓦



第1図 中原窯跡の位置と周辺の主な遺跡

等の出土する地点があるとの」教示で、加曾利貝塚博物館の職員が現地を踏査した結果、農道断面で土器片を含む灰層を確認し、その際の試掘で多量の遺物の包含をみた。さらに、このときの記録をもとに、倉田が現地踏査を行い、また遺物の観察から検討を加えた結果、「当地を須恵器製造窯跡と判断するに至った」という。崖面での土層観察の結果やボーリング棒による探査から、上下2段に2基づつ計4基の窯跡の存在を考えている。なお、踏査の際に灰層中に女瓦片を確認し「須恵器と瓦を併焼した兼用窯であった可能性」も示唆している。

試掘で出土した須恵器は、杯・広口壺・甕・瓶の4器種で、このうち杯については調整手法によりI、II類に大別し、さらに器形・色調等の特徴から、I類を2種、II類を3種に細別し考察を加えている。これらの杯のなかには、それまでの集落跡の調査で「須恵質土器」「くすべ焼成土器」「土師質土器」といわれていた土器類が共伴しているが、すべてを須恵器として捉え、また「須恵器焼成技術の変化は使用粘土の耐火度に主に起因することなど」を指摘している。操業年代については、山田水呑遺跡や新久窯跡の出土資料との対比から「9世紀中葉から後葉の間」と述べている。

その後、中原窯跡について考察されたものの基本的見解はこの報告によっているが、操業年代については若干の変化がみられる。生産遺跡の分布調査報告書（須田他 1986）では「9世紀前半代」となり、翌年には倉田が「中原産と考えられる須恵器」の出土例とその様相から「承和五年（838）銘墨書き土器を伴出した八千代市北海道D048号住居跡」との類似点を考慮して「中原窯跡を9世紀中頃」と想定している（倉田 1987）。

また、下総の須恵器窯の成立は「主に民間需要を満たすための日常什器を生産する」ための「地方窯」で郡司層により開始され、その故地には「常陸國のその中でも南西部の霞ヶ浦の西側に広く点在する窯跡群」を候補地としてあげている。さらに、変遷について「杯底部の箆切り後の調整に吉川（回転箆削り）→中原（回転箆削り／手持ち箆削り）→宇津志野（手持ち箆削り）と推移し、それと共に底径の小型化・器高の増加傾向など、形式的変遷を迎ることは確実である」と見通しを述べている（倉田 1987）。

供給関係については、千葉市有吉遺跡（阪田他 1975）、高沢遺跡（関口 1987）など千葉市域の奈良・平安時代の集落跡や、東金市久我台遺跡（萩原他 1988）、八千代市村上込の内遺跡（天野 1974・1989）など広い範囲の遺跡に持ち込まれていることが知られている。中原窯跡で生産されているような須恵器は、この時期の集落跡を調査すればよく出土する。そのすべてが中原窯跡の製品とは考えられないが、それでも都を越え、国を越えて供給範囲が広がっているという事実は重要である。今後は、今回の調査成果を踏まえ、その供給関係と体制についてもさらに総密に明らかにしていくことが課題の一つとなろう。

II 調査の概要

1. 調査方法

調査区の設定 中原窯跡の調査区域は、杉の植林が行われ下草はきれいに刈られており、現地形の観察は比較的容易であった。窯跡の位置する台地は、上段に大きく広がる平坦面から西側に斜面が続くが（上段斜面）、その下の中段には平坦面が形成され、さらに下段には急な斜面が再び続き谷津に向かっている。下段斜面は途中で農道によって切られている。中段の平坦面は一段低い北側の区画と南側の区画とに大きく分けることができる。現地踏査の時点では現地形から判断して、上段と下段の斜面に2段にわたって窯跡が位置し、中段の平坦面にはこれらの灰原が広がっていると想定してトレンチを設定した。

本来ならばこのような場合、確認トレンチを公共座標にあわせて斜面に直交するように設定し、検出された窯体をもとにトレンチを拡張することにより、窯跡の位置と分布を把握していく方法が一般的であるが、現地は植林が行われているため、木と木の間に幅1m前後のトレンチを任意に設定し確認調査を行わざるを得なかった。トレンチは植林の間隔が比較的広い斜面上に主に平行に設定したが、状況に応じて直交するように掘り下げることができたトレンチもある。植林の方向が一定でない場所については、トレンチの方向も長さも不定である（第2図）。なお、全体に表土は薄く、表土下30~50cmで主な遺構は確認されている。

このような作業に先行して基準点測量を行い、あわせて周辺の地形測量を実施した。

主なトレンチの調査概要 第1トレンチは、調査区を横断するように南端に設定したトレンチで、中段斜面以下で灰原が確認されている。これに伴う窯体は、南側の調査区域外に位置している可能性があり、中原窯跡の範囲は谷津奥へ向けてまだ広がっているようである。なお、上段の平坦面からは、古墳時代後期の土器片が検出されており、当該期の集落の存在が予想される。第2トレンチも同様に設定したトレンチで、第1トレンチから延びた灰原が中段平坦面以下に広がっている。この平坦面で灰原の調査中に1号窯跡の窯尻を検出し、1号窯跡調査の契機となった。なお、上段斜面では旧石器時代のチャート製の剥片が検出されている。第3トレンチも同様に設定したトレンチで、ここでは上段斜面から2号窯跡の窯体の一部が検出されたので、トレンチを北側へ斜面に沿って拡張し窯体の確認につとめた。さらに隣接する第7トレンチの一部も拡張して窯体の北側の立ち上がりを検出した。中段平坦面以下から第4・7・8トレンチにかけては、2号窯跡の灰原の広がりが確認されている。また、中段平坦面では灰原の一部を掘り下げて調査を行った。第5・6トレンチは上段平坦面に設定したトレンチである。窯体等の遺構は確認されなかつたが、表土下約10cmと浅いレベルで多数の須恵器を伴う遺物集中地点を検出している。この中には中原窯跡では生産されていない須恵器長頸瓶の破片も含まれており、平坦面に展開する集落跡に関連する遺物がこの地点に廃棄されたものと考えら



れる。第10~13トレンチは、上段斜面から下段斜面にかけて窯体の存在と灰原の範囲を確認するために設定したトレンチで、窯体は確認できなかったが、中段平坦面以下に広がる灰原を検出している。この灰原に伴う窯跡を検出するため、さらに第13トレンチの上段の斜面に第14・20・21トレンチを設定したが窯跡は確認されず、調査できなかった杉の下に位置しているものと考えられる。第13トレンチ南端ではわずかに灰原の範囲が検出され、中原窯跡における北側の限界を確認することができた。なお、第11トレンチの上段斜面では中世のかわらけ片が検出されている。第15トレンチ周辺は平坦面が形成されているため、工房跡等の遺構の存在を確認する目的でトレンチを設定した。明確な遺構は検出できなかったが、第15トレンチ東側半分で暗褐色に広がるプランを確認したのでトレンチの東端を1×1mの範囲で掘り下げた。その結果、後述するように表土下1mで多量の遺物が密集している包含層を検出した。この中には土器類の他にハマグリ、シオフキなどの貝類も含まれており、上段平坦面に形成された集落跡からの廃棄物と考えられる。第16~19トレンチでは遺構は検出されず、出土遺物も少量であった。

2. 調査の経過

10月2日から準備を行い、10月3日に器材搬入、テントを設営し、調査区域の南端から任意にトレンチを設定し順次掘りはじめ、現地における調査を開始した。

上段の平坦面では表土下20~30cmで地山に達し、遺物の出土点数もわずかであったが、斜面下方へ掘り進むにつれ灰原の炭化物・焼土粒を多く含む黒色土の広がりを検出しはじめた。灰原は農道で掘削された面にまでびており、上面でも多数の遺物の出土をみた。5日に第3トレンチ上段斜面で表土下20cmのところで焼土粒・砂質粘土粒を検出した。サブトレンチを設定して部分的に掘り下げると、焼土ブロックやスサを混入した砂質粘土ブロックが次々に検出されはじめ、窯跡であることが判明した(2号窯跡)。2号窯跡は一部を拡張したのち、撮影・図面作成を行い、27日には調査を終了した。12日に第2トレンチ中段平坦面の灰原を精査中に硬化した床面の立ち上がりを検出、トレンチを拡張して窯尻であることを確認した(1号窯跡)。16日から斜面側のトレンチを拡張しながら掘り下げ、27日には前庭部の一部まで検出し、撮影・図面作成を行った。このような窯跡の調査と平行して各トレンチの掘り下げ、灰原・遺物集中地点の調査と必要な記録類および全体図の作成を同時に実行し、18日からは作業の終了したトレンチ・遺構から順次埋め戻しを開始した。31日に1号窯跡の調査終了後、ただちに埋め戻しを行い、器材の撤出・テント等の撤去をもって現地における作業をすべて完了した。

整理作業は11月1日から水洗・注記・図面・写真等記録類の整理を開始した。16日から復元作業、実測、トレース、採拓を行い、12月1日からは遺物の写真撮影、挿図・図版作成、原稿執筆を順次行って、12月28日にすべての作業が完了した。

III 検出された遺構と遺物

今回の調査で検出されたのは、2基の窯跡、灰原、それに同時期の遺物集中地点2か所である。灰原については、2号窯跡に伴う第3トレンチの灰原と、伴う窯体は判然としないが第10トレンチの灰原A・Bを掘り下げ、後述するような多数の遺物を検出した。他の灰原は範囲を確認するにとどめたが、精査するたびに遺物が多量に出土するような状態であった。第15トレンチの遺物集中地点は、本窯跡の経営に係る集落跡に伴う可能性が高く、相互の関連性や窯跡を成立させたこの地域の一端を知るうえで重要な資料となるであろう。

1. 1号窯跡

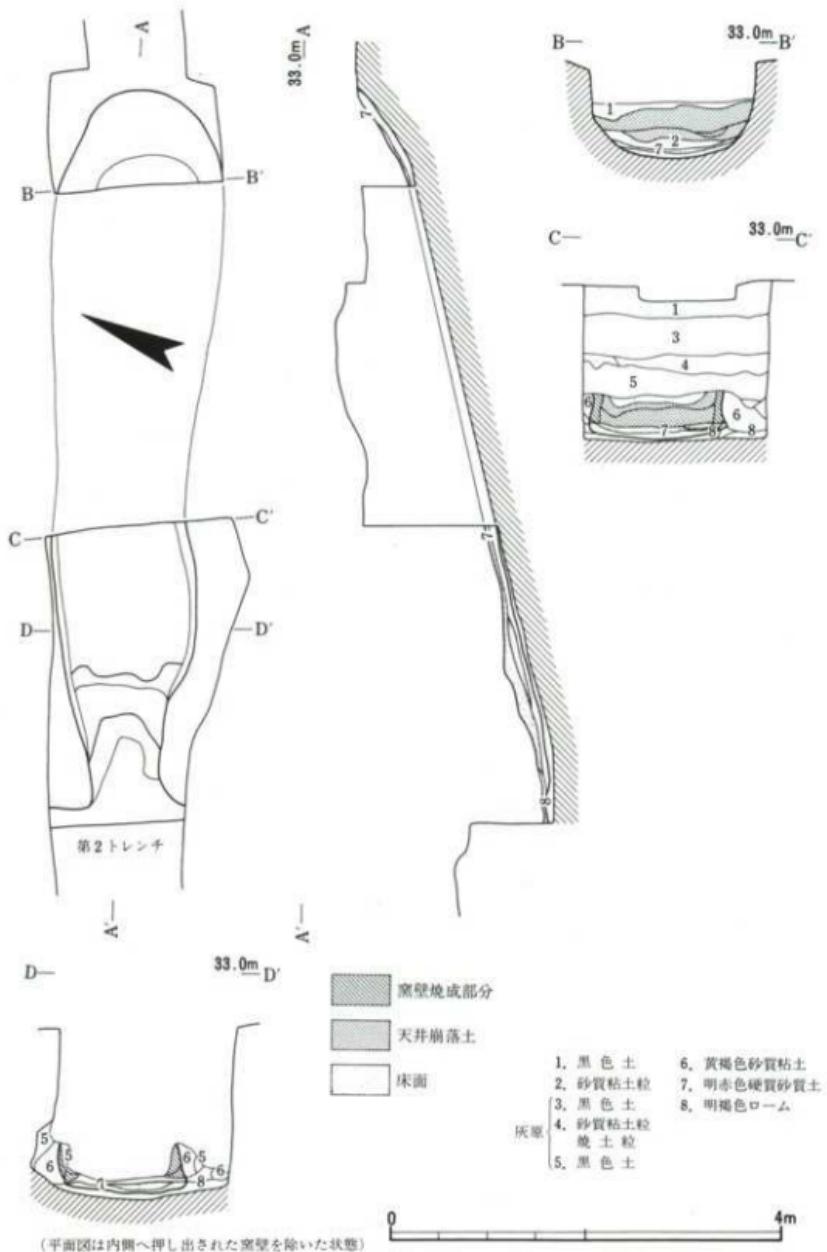
調査区南端の下段斜面に位置し、第2トレンチ下段平坦部の灰原を掘り下げた際に検出された窯尻によって、本窯跡の存在が確認された。第1トレンチ中段から第2トレンチにかけて広がる灰原によって上部を大きく削平され、天井部もすでに崩落していたが、上面を覆っていた厚さ約1mの灰原のため、焼成部などの床面は良好に遺存していた。また、斜面下方に広がる本窯跡の灰原は、農道によって掘削され断面に露呈しているが、崩落の危険があるため調査を行うことはできなかった。調査は、焼成部の大半が杉の下に位置しているため、窯体の約2分の1、前庭部のごく一部について行った。

構造（第3図、図版3）

ローム層を掘り込んだ半地下式窯窯で、窯体は黄褐色の砂質粘土で構築されている。燃焼部と焼成部との境に緩い段が形成され、傾斜変換部となっている。煙道部・窯体・前庭部・灰原から構成されていると考えられるが、このうち検出できたのは窯体と前庭部の一部である。確認できた長さは7.2mで、主軸方位はN-69°-Eを指している。窯体は焚口から窯尻まで遺存し、全長6.6m、床面の比高差は2mである。平面形態は窯尻付近が丸みをもつ長方形を呈している。

焚口～燃焼部は腰形で、長さ1.4m、幅は焚口で0.7m、焼成部との境では1.1mを測る。焚口は地山を浅く掘り込んでつくられ、燃焼部との境に傾斜変換部となる緩い段をもち、床面は軟弱で焼土粒や砂質粘土粒が薄く堆積している。燃焼部の焼成床面は一面のみで、灰色を呈し、補強のため須恵器片が敷き詰められているが軟弱である。窯壁は大半が削平されていたが、遺存していた部分は赤化しよく焼成されている。

焼成部は床面幅1.1m～1.2mを測り、約14°の傾斜によって構築されている。段は設けられておらず、やや凹凸のある床面には須恵器片が敷き詰められ、暗灰色の硬質な床面が形成されている。焼成床面は一面である。窯壁は上面が他の窯跡の灰原形成の際に削平されていたが、残りの部分の遺存は良く、床面からほぼ垂直に立ち上がり、遺存高0.3mを測る。赤化してい



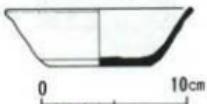
第3図 1号窯跡実測図

るが、灰色に還元された部分は認められなかった。また、土圧によって窯壁の一部が窯体内に押し出され入り込んでいることが確認された。崩落した天井部は床面直上で検出され、スサを混入した黄褐色の砂質粘土で構成されている。床面は窯尻までよく焼成され、硬質な面が良好に遺存している。煙道部はすでに削平され、その形態や規模は不明である。

前庭部は焚口から大きく開くように続いているが、ごくわずかにしか調査できなかつたため詳細は明らかではない。

遺物（第4図）

本窯跡で検出された遺物は、須恵器の他は瓦片3点である。ほとんどが床面中に敷き詰められた状態で出土している。窯体内で焼成された須恵器は確認されていない。須恵器は、一部杯片もあるが、多くは甕の体部片である。



第4図

1号窯跡出土遺物実測図
である。色調は褐色～暗灰褐色を呈している。口径12.6cm（推定）、器高3.9cm、底径7.0cm（推定）を測る。Ⅲ群に分類される。

図示できる遺物は少ない。第4図は燃焼部に近い焼成部の床面中から出土した杯である。底部を回転ヘラ切りによって切り離した後に、底部全面と体部下端をヘラ削りで調整している。胎土には石英粒、長石粒を含み、焼成は良好である。

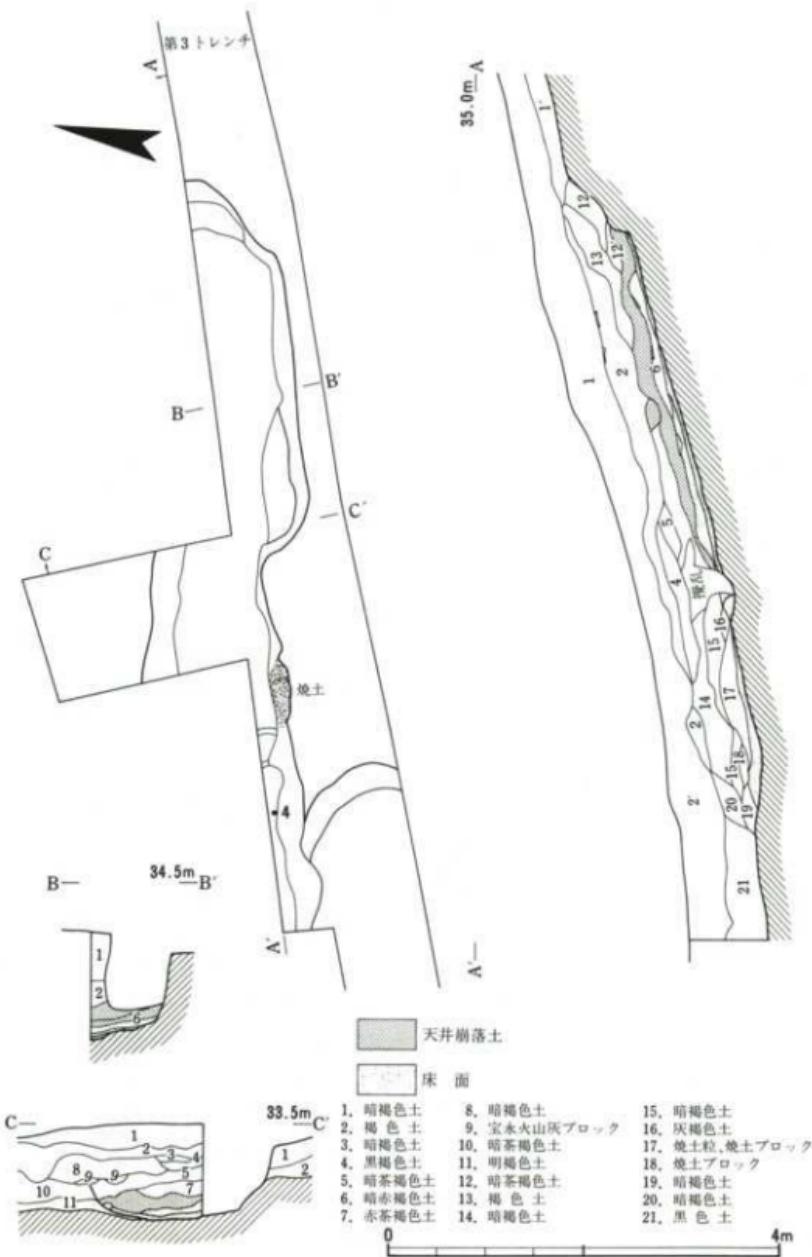
2. 2号窯跡

調査区南側、中段斜面に位置する。第3トレンチを調査中に焼土を検出したのでトレンチを拡張し掘り下げたところ窯跡であることが確認された。上面はすでに削平され、天井部もすでに崩落していたが、床面は良好に遺存していた。窯体の北半部と焚口～燃焼部の大半や灰原の一部は杉の苗木が植林されているため、北側の一部を除いて掘り下げられなかったが、全体の約2分の1を調査した。

構造（第5図、図版4）

ローム層を掘り込んで構築された半地下式窯である。煙道部・窯体・前庭部・灰原から構成されていると考えられ、すでに削平された煙道部を除いて確認できた。検出した長さは7.6mで、主軸方位はN-81°-Eを指している。窯体は焚口から窯尻まで遺存し、全長6.0m、床面の比高差は1.6mである。

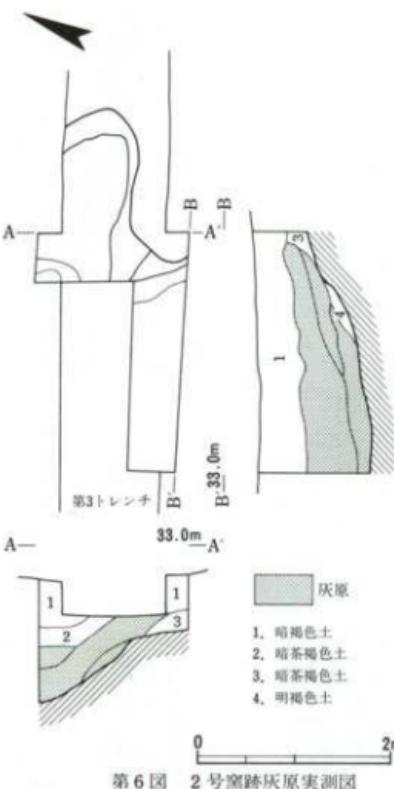
焚口～燃焼部は長方形を呈し、ローム層を浅く掘り込んでつくられ、現存長約2m、床面の幅は燃焼部で0.8mを測る。焚口では幅が狭まり、さらに径0.4mの浅いくぼみが形成され、よく焼成され赤化した窯壁の一部が遺存していた。床面は一面のみで暗茶褐色を呈している。燃焼部の焼成床面は一面で、補強のため須恵器甕片が敷き詰められている。よく還元された状態で灰色を呈しているが、赤化している部分もあり比較的堅緻である。窯壁はほとんど遺存して



第5図 2号窯跡実測図

おらず、土層断面の観察でからうじて約30cmの立ち上がりが判断できる程度である。表土下50cmで宝永火山灰が確認されており、18世紀初頭までにはすでに削平されていたと考えられる。

焼成部は推定床面幅1.4m前後を測り、約16°の傾斜によって構築されている。床面は平坦で、焼台に使用されていたと考えられる甕や、遺棄された甕などの破片は床面上から多数検出されている。燃焼部で確認されたような灰色の堅密な床面は検出されず、赤化しよく焼成されている面が一面確認されている。床面は奥へ進むにつれ凹凸が目立ちはじめ、約18cmの段を設けて立ち上がり、窯尻へと続いている。窯壁は、窯尻付近で還元された部分が遺存していたが、その他の個所では全体に地山が焼成されている程度であった。天井部は崩落しており、1号窯跡と同様にスサを混入した砂質粘土で形成されている。煙道部はすでに削平されているため形態や規模については不明である。

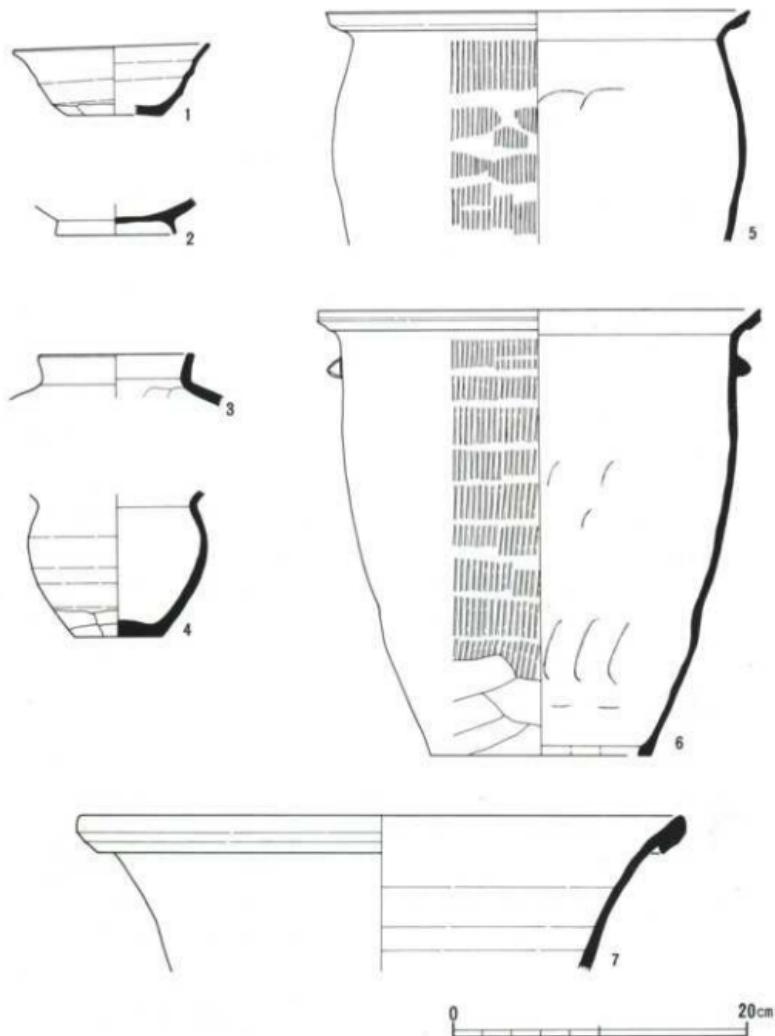


遺物（第7図、図版8）

本窯跡で検出された遺物は、須恵器の他に瓦7点が出土している。多数の甕体部の破片を中

前庭部は焚口から浅く掘りくぼめられて統一しているが、灰原がすぐ形成されているようである。

灰原は前庭部から続く平坦面から斜面にかけて広がっている。第3・4・7・8トレンチで検出された灰原は本窯跡に確実に伴うが、第10トレンチでは別の窯跡の灰原と一部重複している。第3トレンチで灰原を部分的に拡張して掘り下げた（第6図）。現地形では平坦面が形成されているが、灰原は地山を0.7m掘りくぼめ、徐々に東側の斜面に向かって底面は下がっている。これは築窯に際してあらかじめ灰原の区域を掘り下げたものと考えられる。灰原は炭化物を多く含んだ黒色土を基調に、焼土粒や窯体に使用されていた砂質粘土粒を混入している。中原窯跡全体の灰原について言えることだが、灰原は灰というよりも炭化物が多く黒々としているのが特徴的である。狭い範囲を掘り下げただけであるが、遺物の包含は多く、甕の体部を中心にして短頸壺片（第7図3）も出土している。

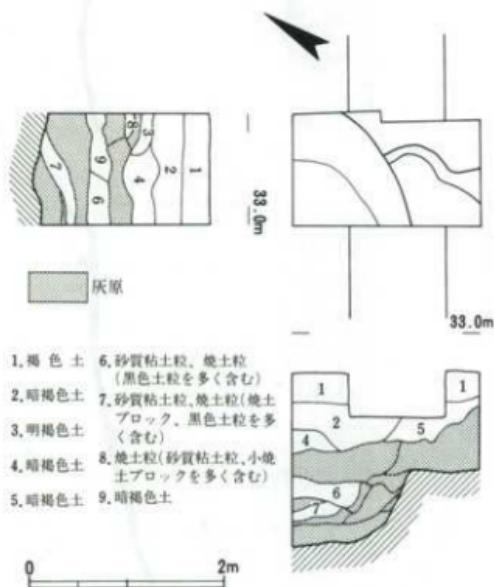


第7図 2号窯跡出土遺物実測図

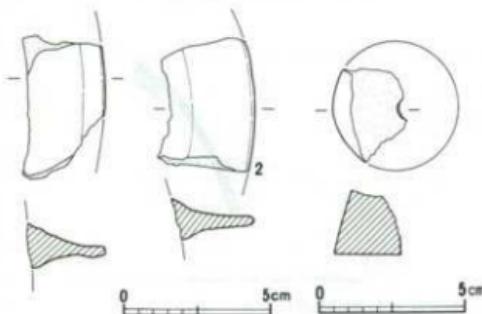
心に、焼成部床面上と燃焼部床面に敷き詰められ、あるいは遺棄された状態で検出された。また、小型甕（4）が前部の焚口付近で床面よりややういて検出された。3・4以外は焼成部床面からの出土である。

3. 第10トレンチ灰原

調査区の中央部に広がる灰原で、2号窯跡に一部属するが、大半は第11・12トレンチの間に位置する未確認の窯跡のものと考えられる。2地点について掘り下げ、東側の平坦部に位置す



第8図 第10トレンチ・灰原A実測図



第9図 羽釜・鋲片実測図

第10図 紡錘車実測図

灰原A (第8図～第12図、第15図、図版5・6・8・10)

1.1×2mの範囲を掘り下げ、表土から深さ1.7mで底面に達した。斜面上部から広がる灰原の一部で、2号窯跡の灰原との重複関係は判然としない。確認した範囲は緩い曲線をもって下方に向かってのびている。地山を緩やかに0.7m掘り下げ、底面にはやや凹凸がある。土層断面の観察では、灰原は3層に分かれしており、その間層には窯壁の一部と思われる焼けた砂質粘土ブロックを含んでいる。少なくとも3回の操業回数を知ることができる。遺物の包含は多く、底面に近づくにつれその出土量も増加する。甕・杯の破片が最も多いが、瓦も32点出土している。わずかな面積であるが、遺物の集中度は極めて高い。

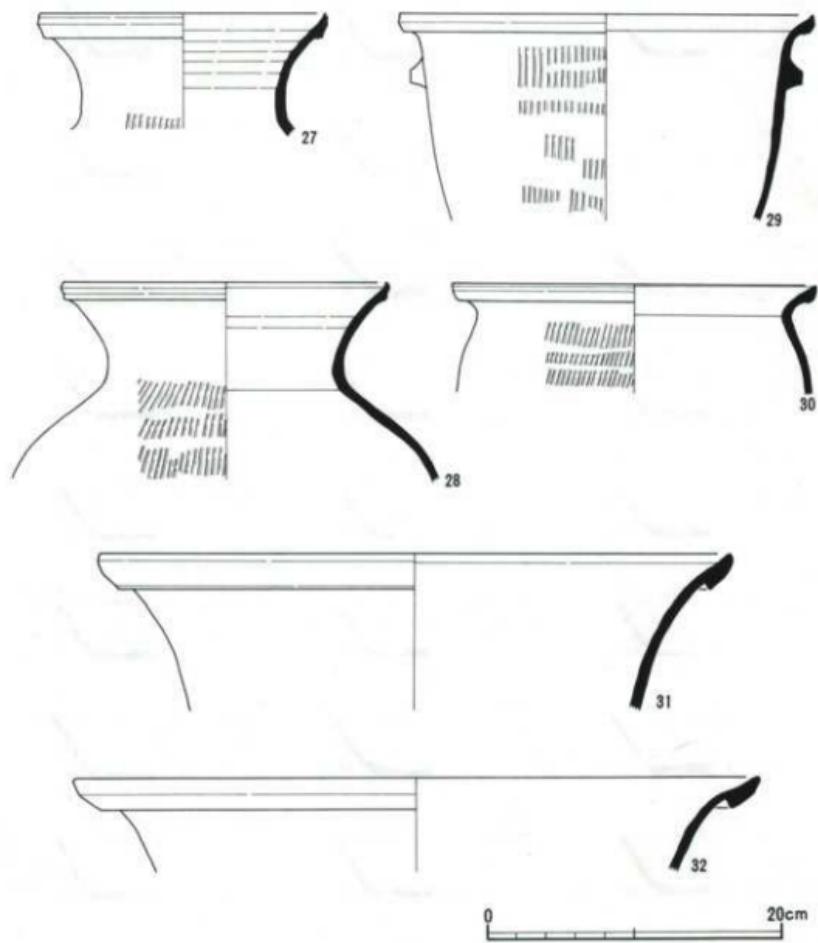
灰原Bは、第10トレンチの西端を1×1.2mの範囲で掘り下げ、表土から約1.6mで地山面に達した。窯跡は確認されていない。灰原Aの北側面とはほぼ同じ堆積状況

で、やはり遺物は多量に出土している(第13～15図、図版7・8・10)。

遺物の中で注目されるのは羽釜の鋲片(第9図)である。羽釜片は今回の調査で農道掘削面(1)と灰原A 2から(2)点が出土している。いずれも還元焼成されており、明灰褐色を呈



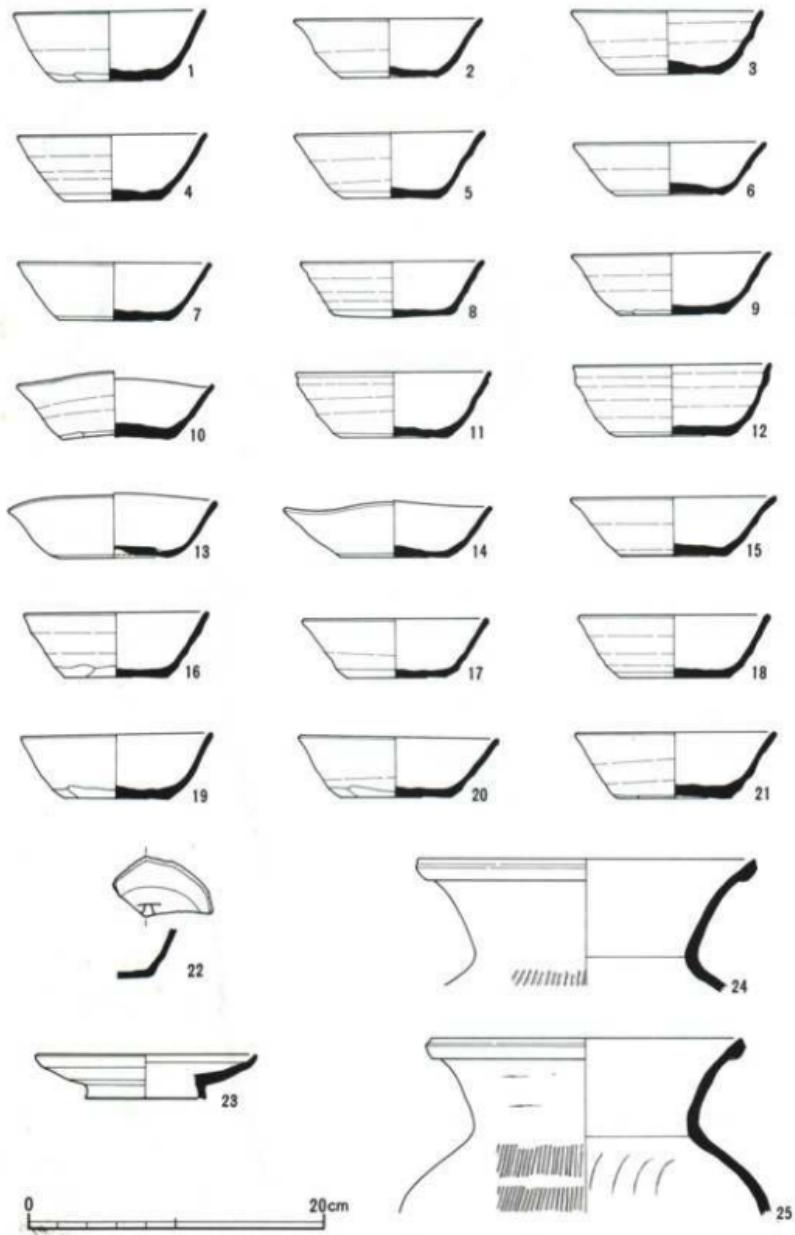
第11図 第10トレンチ・灰原A出土遺物実測図(1)



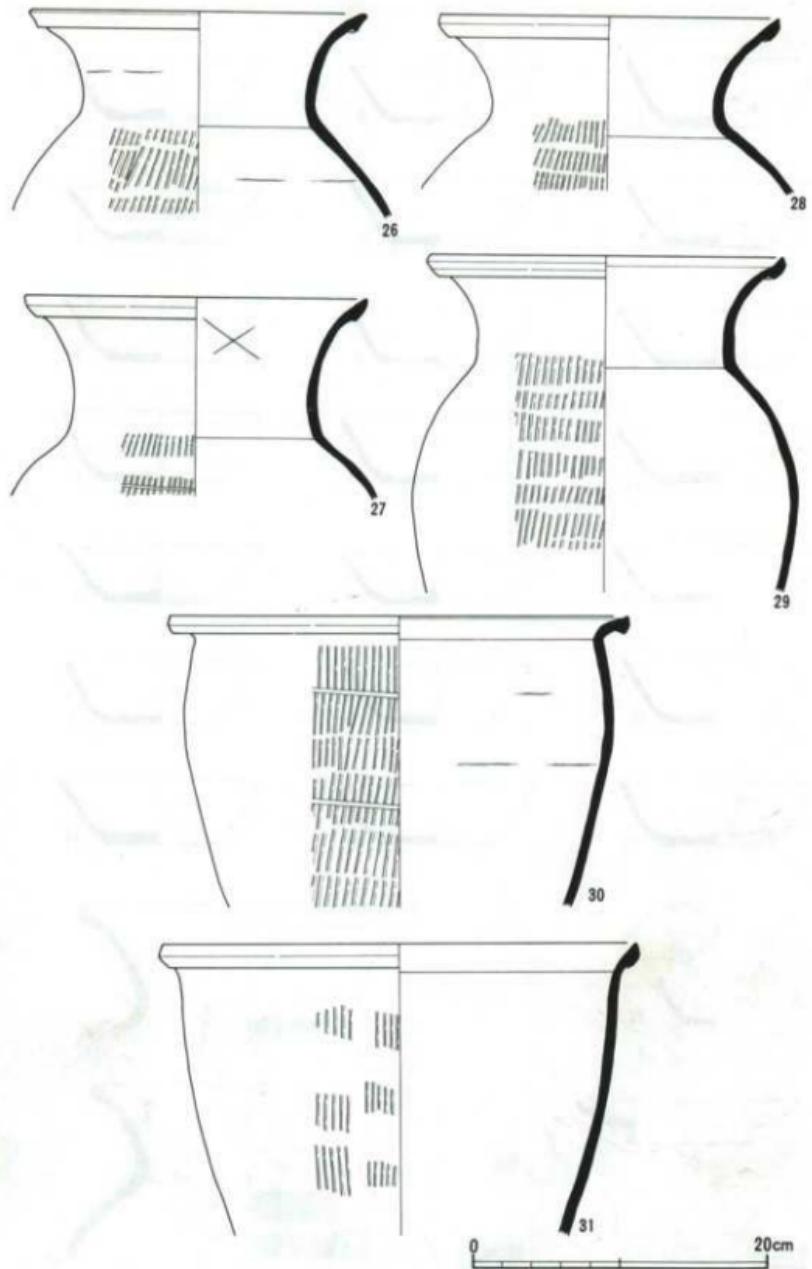
第12図 第10トレンチ・灰原A出土遺物実測図(2)

している。胎土は須恵器と同じく石英粒や長石粒を含んでいる。中原窯跡で焼成されていた可能性が高く注目される。また、紡錘車（第10図）は1/3が遺存し、径4.3cm（推定）、孔径0.9cmを測る。褐色を呈しているが、焼成は堅緻である。

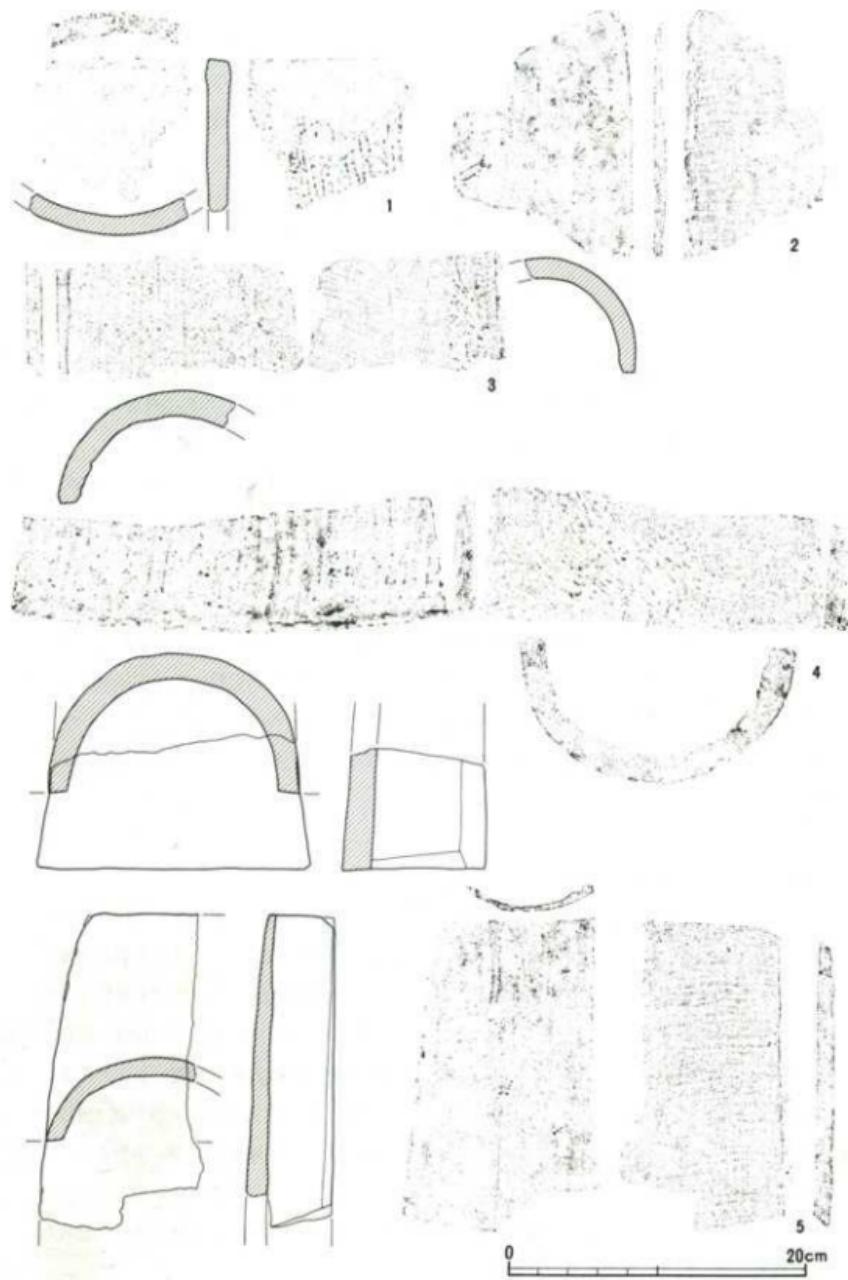
多数の須恵器は主に杯・甕A・甕B・瓶で器種構成されているが、この中にはこれまで知られていなかった器種として皿と大甕が出土している。灰原Aからは皿（第11図25, 26）2点が



第13図 第10トレンチ・灰原B出土遺物実測図(1)



第14図 第10トレンチ・灰原B出土遺物実測図(2)



第15図 第10トレンチ・灰原出土瓦拓影及び実測図

出土し、いずれも無高台で器高は低く、口縁部は短く内傾する。灰原Bの皿（第13図23）は、高台付皿で高台端部に浅い沈線が巡り、口縁部はやはり短く内傾して立ち上がる。図示してある大甕（第12図31,32）は、推定口径がそれぞれ43cm、46.6cmと大形で、口縁部を貼り付け肥厚させている。焼成は良好で灰色を呈し、灰原の底面から出土している。

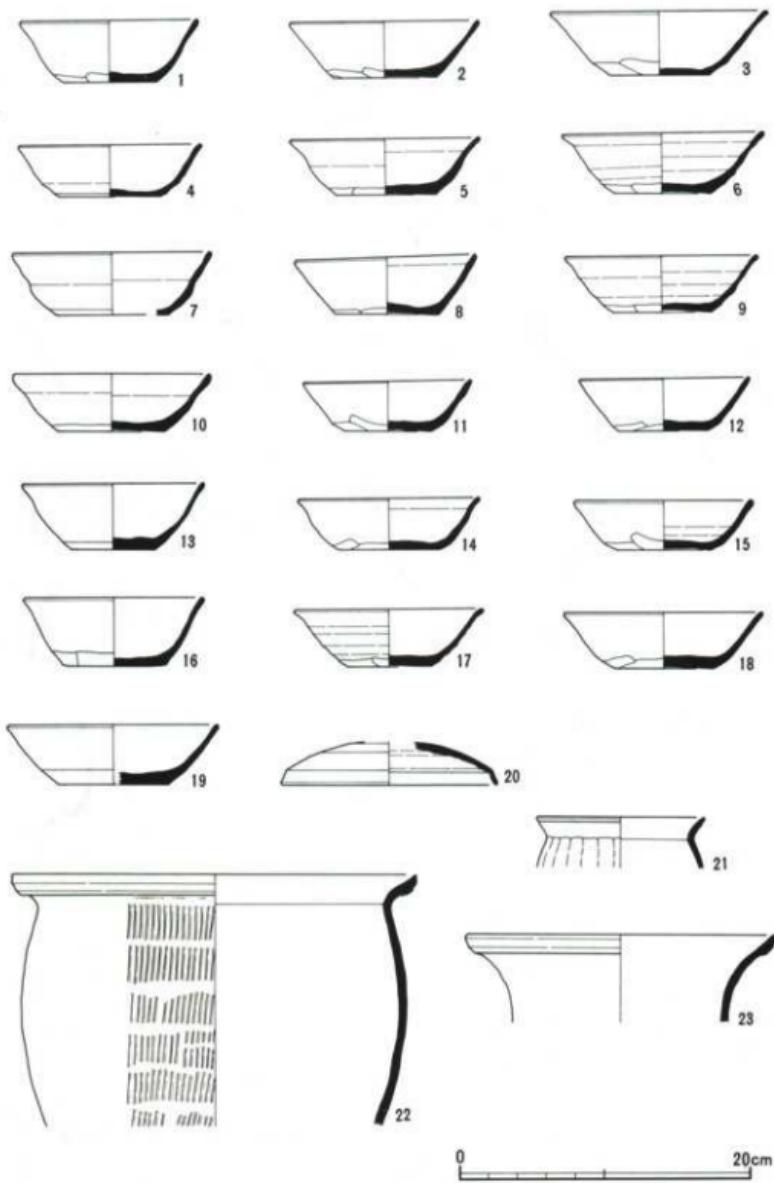
杯は焼成により分類したI群・II群・III群の須恵器をすべて含んでいる。灰原Aでは、I群の須恵器（第11図1～21）が最も多く、II群（21～23）、III群（24）はわずかである。灰原BでもI群（第13図1～15）が多く、II群（16～18）、III群（19～21）は少数で、ともにI群には焼き歪んだ器形が多い。概して、I群の器形がバラエティーに富んでいるのに対し、II群、III群のそれは比較的規格化され、大きな変化はない。なお、杯（第11図1）の底部外面に「万」、杯（第13図22）の内面には「へ」がそれぞれ線刻されており注目される。

瓦（第15図）は、灰原A・Bあわせて53点が出土している。1は平瓦で、凸面は太い繩で叩き締められ、端部は幅広くナデで調整されている。凹面の布目は密である。2～5は丸瓦である。2の凸面はよくナデが施され、叩きの痕跡は消されている。凹面の布目は中央でやや乱れている。3の凸面もよく調整されている。凹面の布目は側面のほつれの痕跡が明瞭である。また、側面にベンガラが残る。4は広端部が遺存しており、凸面は太い繩で叩き締められた後、ナデによってよく調整されている。わずかに綺目が残る。凹面は布目を粗いナデで部分的に消している。端部はヘラ削りされ平坦である。5は行基葺瓦で、狭端部側が遺存していた。凸面はナデで調整され、狭端部は細く脆弱である。凹面の布目はやや粗く、中央で粗密がある。側面にはベンガラが残る。

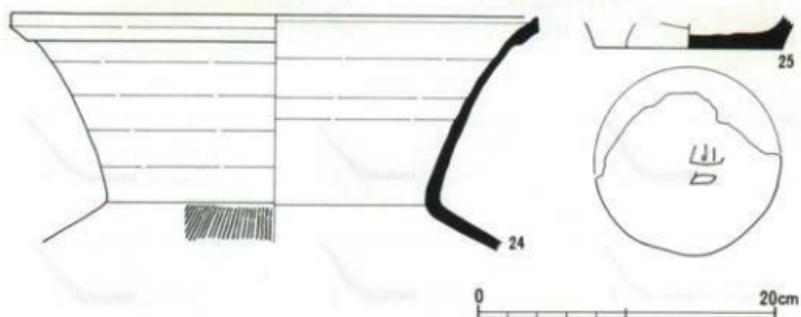
4. 各トレンチの出土遺物

各トレンチからも灰原を中心に多くの遺物が出土している（第16図～第19図、図版9・10）。第1、2トレンチの灰原上面から検出された杯（第16図1、3～12）は同一窯跡の製品と考えてよく、器形は変化に富んでいるが、I群の杯（4～7）は比較的少なく、色調も灰色というよりはやや褐色を帯びたものが多い。III群の杯（1、3、8～12）のうち、11・12は口径11.5cmと中原窯跡の製品中最も小型で、色調は明褐色～明灰褐色で焼成はやや軟質である。中原窯跡の最終時期の製品であろう。杯の他には蓋（20）、小型甕（21）、甕A（22）、大型の甕（第17図1）も出土している。蓋はつまみが欠損しており、口縁部はやや外傾している。小型甕は、これまでの集落跡の調査で土師器として認識されてきた器種で、今回の調査ではこの1点のみの出土であるが注目される。また、第2トレンチからは底部外面に「山口」と線刻された甕Aないし甕B（第17図2）が出土している。

第11トレンチの灰原から出土した杯（14～19）のうち、14がI群であるほかはIII群に属している。器形は16,17がやや異なっているが、他はよく類似している。



第16図 各トレンチ出土遺物実測図(1)

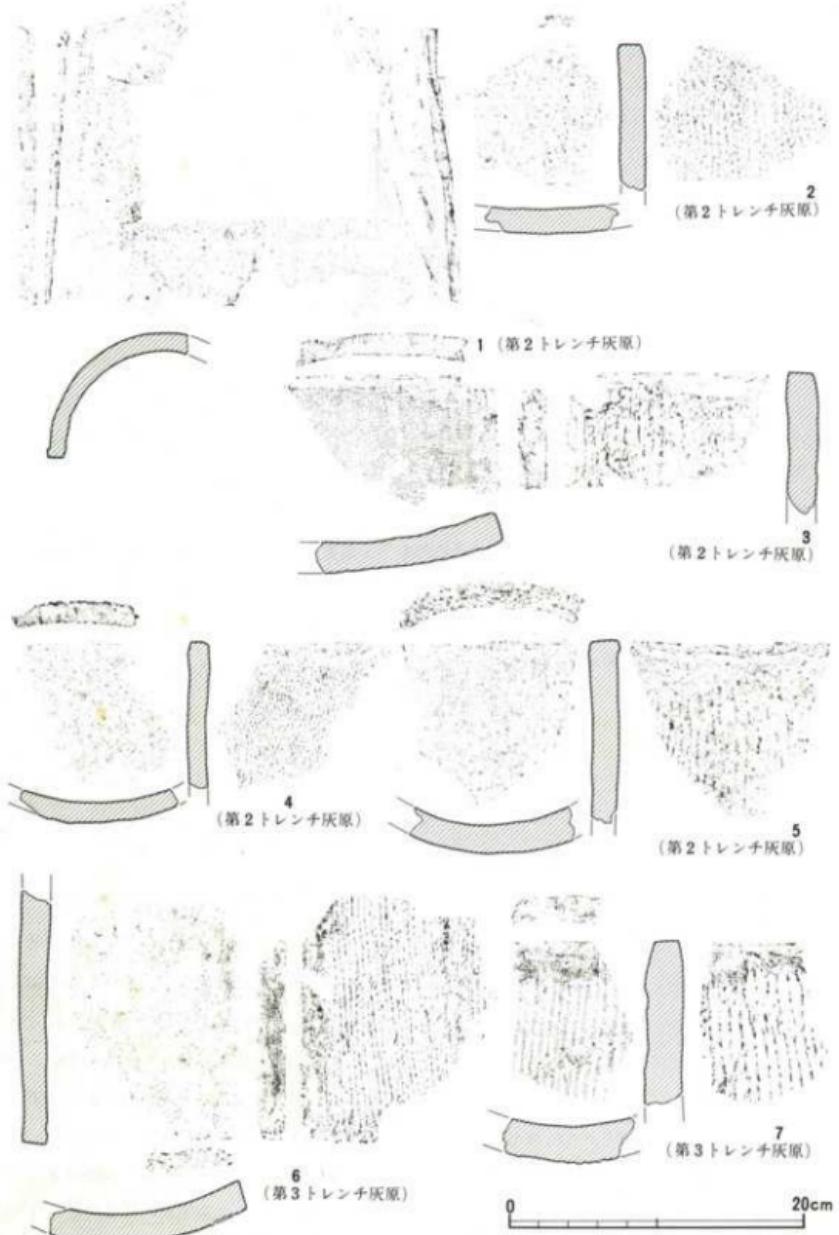


第17図 各トレンチ出土遺物実測図(2)



2号窯跡………5,22
第1トレンチ灰原………2,3,5,8-12
第2トレンチ灰原………7,20,21
第10トレンチ・灰原A………14-17
第10トレンチ・灰原B………4
第10トレンチ・括………19
第12トレンチ・括………13
第15トレンチ・括………1
表様………18

第18図 各遺構出土遺物拓影図



第19図 各トレンチ出土瓦拓影及び実測図

第18図には今回の調査で出土した特色のある遺物を示した。1～12は、頸部に櫛描波状文が施された甕Bである。出土量は少ない。口縁部直下に施文されているものが多いが、4のように頸部に近い位置のものもある。3～4本で一単位をなし、6・7・8ではその上下は平行沈線で区画されている。全体に丁寧な施文であるが、4・5のような雑なものもある。

13は体部に線刻が施された甕Bの破片で、記された符号の意味は不明であるが、文字のようにも見える。

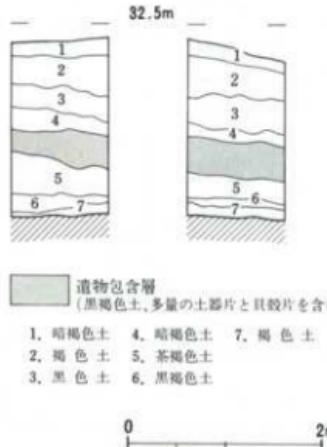
14～17はヨコタタキの須恵器である。今回の調査では4点のみの出土で全体に稀少である。14・15は甕Aの口縁部片で、15は格子状に叩き締められていることがわかる。16・17は甕Bの体部片である。

18～22はカマ印である。甕Aや甕Bの底部にあるものが多いが、19のように瓶にもある。「+」「×」、その他に「キ」や22のようにやや複雑なカマ印もあるが、器種によるカマ印の違いは判然としない。

各トレンチから出土した瓦は第19図に示した。1は丸瓦で、凸面はタタキの痕跡がきれいにナデで消され、凹面では側面の布のはつれの跡もよく調整されている。2～7は平瓦で、凸面に繩タタキの痕跡がよく残る。比較的太目で粗いものが多い。5はナデで部分的に消されている。凹面の布には、5のように密なものから、3のような粗いものまである。6は粗くナデられ、7はタテに規則的なナデが加えられている。6は内外面に亀裂が著しい。

5. 遺物集中地点

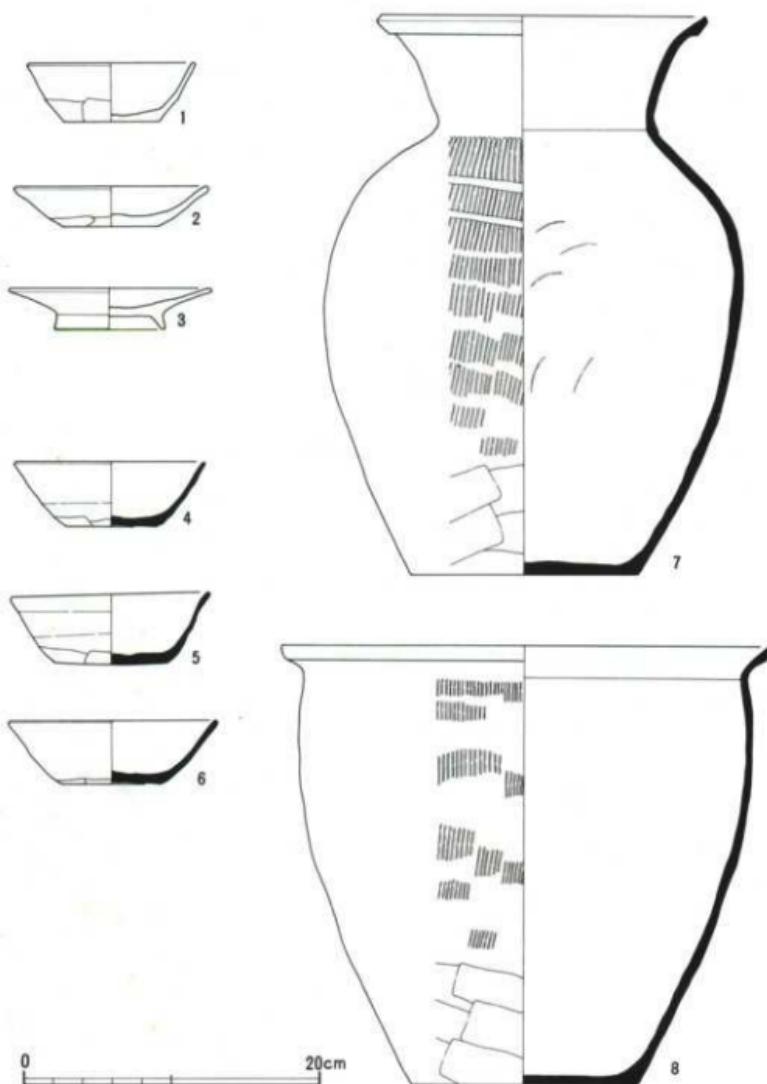
窯跡に係る遺構の他に、上段平坦面に設定した第5・6トレンチと北側中段平坦面の第15ト



第20図 第15トレンチ・セクション図

レンチからは多量に遺物を包含した地点が確認された。

第5・6トレンチでは、窯跡に隣接する遺構は検出されなかったが、表土下約10cmのレベルで多数の須恵器片が集中的に出土した。両トレンチにまたがる範囲に広がっているが、伴う遺構はない。甕A・甕Bの体部片を中心に杯片も含まれているが、図示できる遺物はなかった。このなかには須恵器長頸瓶や置きカマドの一部と思われる破片もあり、平坦面に展開する集落跡から一括廃棄されたものと考えられるが、中原窯跡の操業時期とはほぼ同時期の遺物である。第15トレンチ（第20図、図版5）では東側半分に広がる暗褐色プランを検



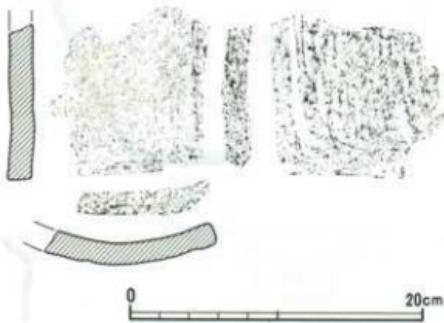
第21図 第15トレンチ出土遺物実測図

出し、東端の一部を 1×1 mの範囲で掘り下げたところ、表土下1mで厚さ30cmに堆積した遺物包含層を確認し、さらに掘り下げたところ、表土下1.8mで地山面に達した。この面の直上からも遺物が少量ながら出土している。全体を調査していないので不明な点が多いが、幅5mほどの範囲を斜面に直交するように大きく掘削して土坑を構築したと思われる。この包含層にはハマグリ、シオフキなどの貝類も少量ながらブロックで投棄されており、これらは上段平坦面に展開していた集落跡からの廃棄物で、窯跡と集落跡との関連性が注目される。

遺物（第21・22図、図版9・10）は須恵器を中心に土師器も多く出土し、少量ながら瓦片も含まれている。第21図には一括投棄された土器の一部を示した。1～3は土師器である。杯・皿などの供膳形態が主で、甕・壺などの器種は量的には少ない。1の杯は、小型品で口径11.1cm（推定）を測り、深めにつくられている。2の皿は、やや器高が高く口縁部は外反する。3は高台付皿で、内面にミガキが施されている。

須恵器杯（4～6）はⅢ群に属し、6のように口径に比して底部がやや小型化しているものもある。甕A（8）は、口縁部の肥厚は小さく単純化し、つくりも簡略化している。甕B（7）とともに色調は褐色～暗褐色を呈している。

第22図は平瓦で凸面を太い繩で叩き締めた後ナデで調整し、端部にヘラ削りを施している。凹面の布目は密であるが、端部ではやや粗密が認められる。



第22図 第15トレンチ出土瓦拓影及び実測図

IV　まとめ

今回の調査は、中原窯跡の確認調査という制約があるため、窯跡群全体を解明するということはできなかったが、これまで判然としなかったいくつかの問題について把握することができた。以下、調査結果に基づきこれらの点を述べ、まとめとしたい。

1. 窯跡について

分布状況 成果の第1は、窯跡群の範囲がある程度明らかになったことである。調査区域内でみると、谷津に西面する台地斜面の中段以下に展開する窯跡群は北側の限界をつかむことができた。南側では調査区域外にまでびているが、地形や農道で削平された崖面を観察した結果からは、それほど谷津奥にまでは広がらず、おそらく1～2基が存在する程度であろう。

第2の成果は、トレーンチで確認した窯跡は2基であるが、灰原の広がりから大きくなれば2号窯跡が位置する上段斜面の一群と、1号窯跡の存在する下段斜面の一群の上下2段に築造されていることがはっきりしたこと、その大きな変遷が判明したことである。まず、下段斜面に窯跡群が構築されるが、その廢棄後に上段斜面の窯跡の構築に際して形成された灰原のため上部を大きく削平されている。下段斜面の窯跡群の分布と基數については、上部の灰原層が厚いために正確には把握できなかったが、2～3基程度は存在していたと思われる。上段斜面の窯跡群は、1基のみが確認されただけであったが、灰原の広がりから推定すると、やはり2～3基の窯跡の存在が予想され、全体では上下段あわせて5～8基で一群を形成していたものと思われる。出土した杯などの形式差や調整技法の違いはあまり認められず、下段窯跡から上段窯跡への移行は短期間に行われたものと考えられる。

窯体の構造 2基の窯跡を確認できたが、いずれも全体の2分の1程度の調査であったため、詳細な構造上の検討を加えることはできないが、判明したいいくつかの点について述べてみたい。まず、調査した2基の窯跡は、いずれも基本的に半地下式窯窯の構造を採用していることである。窯体の全長は7.5m前後で、煙道・焼成部・燃焼部・焚口で構成されている。燃焼部の傾斜は15°前後と緩いところになっている。2基の窯跡は基本的には類似した形態をとるが、異なる部分もある。1号窯跡は燃焼部と焼成部との境に傾斜変換部が明瞭に認められるが、2号窯跡では判然とせず、燃焼部床面に浅いくぼみが掘り込まれている。また、焼成部では窯壁が直線的に立ち上がる1号窯跡に対し、2号窯跡では窯壁自体が明瞭な痕跡を残さず緩やかに立ち上がっている。窯床は、1号窯跡が窯尻付近で急傾斜をとり、2号窯跡では焼成部後半に低い段が形成されており、などの構造上の違いが認められる。これらの相違点が何に起因するのかは、わずかな調査では詳細に論することはできないので、ここでは指摘するだけにとどめたい。

下段の1号窯跡は、斜面を利用して構築されているが、燃焼部から焚口にかけての部分は、地山をそのまま掘り下げて形成されたのではなく、もともとこの部分の地山の急傾斜を利用してつくられたようである。これは、隣接する第3トレーナーでも確認されたが、この付近の地山が現地形からは判断できないような傾斜をもっており、またそのことが、この斜面を窯窓に利用した理由でもあったと考えられる。

1号窯の窯体は、比較的良く焼成されていたが、床面を重ねた痕跡は認められなかった。しかし、このことをもって焼成回数が1回のみであったと断定することはできない。それは、2号窯跡でも明らかのように、窯体内に焼成された床面などを残さず、操業のたびに焼土や破損品を丁寧に掻き出していたと考えるからである。これは「1回の操業の焼成室空間を安定して確保でき、計画的な生産が可能」(宇野他 1989)となることもその理由の一つであると思われるが、窯体に用いた粘土の耐火度が弱く高温に耐えられず、操業のたびに新たな窯体をつくりざるを得なかったことも考えられる。

灰原 上段窯跡群の灰原が中段平坦面以下に大きく広がり、確認できた規模は東西12m、南北21mである。南側はさらに谷奥へ向かってのびている。下段窯跡群の灰原は、農道で掘削されているため、その広がりや規模等は不明である。下の谷津まで広がっていると思われるが検出できなかった。確認した第10トレーナーなどでの観察では、前部から伸びるように地山をU字状に確認面から1.2m掘り下げている。これは、現地形からは想定できない掘り方で、おそらく窯窓に伴いそれに続く灰原を予め形成し、当初は一基につき一灰原の割合で計画的に構成されていたものと考えられる。中原窯跡の灰原で特徴的なことは、炭化物の包含がきわめて多いことである。灰層は確認されていない。一般的に須恵器は、まず酸化焰焼成されたのち、薪木を大量に投入して焚口をふさぎ、「くすべ焼成」のような状態にすることによって窯体内を還元し、青灰色の製品を焼きあげるといわれている(この方法では、須恵器は褐色に焼き上がるものが多く、焼成の最終段階で窯体内に水を注入することにより青灰色を呈する、という実験による指摘もある)。この最終段階の焼成の際にも炭化物が多量につくりだされるが、全体に灰原が黒々とした炭化物で形成されていることはやはり一つの特徴であろう。また、炭化物の他に窯体を構成していたスサ入り砂質粘土ブロックや焼土粒を含んだ層も検出され、これは前述したように窯体の改修の際に掻き出されたものと考えられる。このことは、確認した窯壁・窯床などが一面のみで、操業のたびに窯体を全面的に作り替えていたことを示唆している。窯壁の上に新たな粘土を重ねて補強あるいは補修するといった方法をとらず、熱効率の悪い手段を敢えて行った理由として、窯体に使用した粘土の質の悪さが考えられる。このことは、製品の粘土についても既に指摘されていることだが(佐久間 1986)、高温に耐えうるだけの良質の粘土が採取できず(あるいは存在せず)、これが窯の構造や製品の焼成温度にも大きな影響を与え、様々な規制を加えていたと考えるのが妥当であろう。

2. 出土遺物について

器種構成 今回の調査では、杯・甕A・甕B・瓶の他に、皿・高台付皿・蓋・短頸壺・小型甕・大甕が新たに確認され、さらに破片ではあるが羽釜の鉢片も検出されている。

すべての杯は粘土紐で巻き上げ成形され、回転ヘラ削りによって切り離されている。回転方向は右である。体部下端から底部にかけての調整技法は、a. 手持ちヘラ削り、b. 回転ヘラ削りの2手法で、回転ヘラ削りのなかには、底部の中央にヘラ切り痕を残したままのものもある。無調整の杯は出土していない。胎土には、白色の微細な粒子を多く含み器面に噴き出すように現われている。杯はまず焼成の違いから大きく3群に分類した。I群は、色調が全体に灰色で須恵器らしい土器で、芯までよく焼成されている。断面も灰色のものが多いが、褐色をはさむ土器もある。また、焼き歪みが多いのもこの一群の特徴である。法量差から口径12.2cm～12.8cmのものと、13.2cm前後の2類に大別される。調整技法はa手法、b手法ともにある。灰原からの出土は最も多い。II群は、色調が黒色で器面は磨きがかったように平滑である。いわゆる「くすべ焼成」と呼ばれた一群の土器である。断面は褐色であるが、焼成は良好で堅緻である。全体に丁寧なつくりで、調整技法はa, b手法ともにある。法量差から口径12.0cm～12.6cmのものと、13.4cm前後の2類に大別される。灰原からの出土は少ない。III群は、色調が褐色系で全体やや軟質である。いわゆる「土師質須恵器」などと呼ばれた一群の土器である。器面に砂質粘土が付着し、雑なつくりの土器が多い。調整はすべてa手法である。法量差から口径11.5cm前後、口径12.3cm～12.8cm、口径13.1cm～13.6cmのものの3類に大別される。灰原からの出土はI群に次いで多い。

これらの杯が同時に焼成されたのか、あるいは時間差をもっていたのかは今回の調査では明確な答を見出することはできなかったが、第2トレンチ出土の口径11.5cmを測る小形の杯は、操業の最終段階に生産された可能性があり、大きな変遷としては「還元焰焼成から酸化焰焼成」という流れのなかで捉えることができよう。

その他の器種のうち、皿・高台付皿は出土点数は少ないが、口縁部がわずかに内傾するタイプもあり、やや古い様相を残している。2号窯跡出土の小型甕は、これまでロクロ土師器小型甕といわれていた器種であるが、今回の調査で「須恵器」であることが明らかとなつた。最近は集落遺跡からも「須恵器」と認定されるようなものも出土しはじめており、今後は単に色調のみの判別ではなく、製作技法などのより詳細な観察が必要であろう。

千葉県における羽釜の出土例は少なく、わずかに袖ヶ浦町境遺跡（小沢 1985）などで報告されているにすぎない。今回の調査で出土したのは鉢片のみで、全体を復元することはできないが、比較的短い形態で薄い。境遺跡のものとは異なっており、中原窯跡で生産された羽釜がどのような集落に供給されていたのかなど、生産されていた実態の解明とともに今後の大きな課題である。

瓦 出土した瓦は、小片を含めて108点である。ほとんどが平瓦で、このうち1号窯跡から3点、2号窯跡からは4点で、他の多くは灰原からの出土である。最も多く出土したのは、第10トレンチ灰原Aで32点が検出され、比較的大形の破片も多い。ここで問題となるのは、中原窯跡で瓦が焼成されていたのか、ということである。今回の調査結果から判断する限り、その可能性は低い。その理由として、概して破片が小さく全体を復元できる資料が少ないと、二次的焼成を受けている瓦が多いこと、形態や調整技法が不統一であることなどがあげられ、出土した瓦は窯体の補強等に使用されていたものと考えたい。しかし、ベンガラが付着していた瓦片もあり、周辺に存在していた寺院等の施設の廃棄物を持ち込んだことも推定される。この場合、その施設で使用していた瓦を焼成した窯の存在が新たな問題として派生てくるが、今回はその答えを得られるような資料は出土していない。

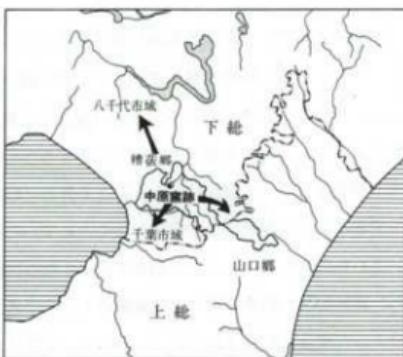
年代 中原窯跡で焼成されていた須恵器の年代については、これまでいわれていた9世紀中頃を中心とした時期を想定して特に問題はないであろう。皿だけに限ってみれば、やや古い形態を残しており、9世紀前半代にさかのぼっても大過ないと思われるが、羽釜の出土もあり、それほど古い時期におくことはできず、9世紀第2四半期を中心とした時期を想定することが妥当であろう。

3. 供給関係について

中原窯跡で生産された須恵器がどのような流通過程を経て消費地である集落遺跡などに持ち込まれたのか、供給範囲はどこまで広がっていたのか、というような生産遺跡と消費地を結ぶ問題は、単に製品の流れを把握することにとどまらず、その時代の社会経済体制に係る大きな問題であるが、ここでは供給先について若干述べてみたい。

これまで中原窯跡の製品が供給されていると思われる遺跡としては、八千代市村上込の内遺跡、同萱田地区遺跡群、千葉市東南部地区遺跡群、東金市久我台遺跡などがあげられ、郡や国の領域を越えて広範囲に供給されていたことは確実である。これらの遺跡で使用されていた須恵器がすべて中原窯跡のものであるとは限らないが、相当数の製品が集落に持ち込まれている。

特に今回の調査では、第10トレンチ灰原Aから「山口」と線刻された須恵器片が出土している。この「山口」を地名とするならば旧上総国山辺郡山口郷が考え



第23図 中原窯跡製品の供給

られる。この山口郷は、現在の東金市山口付近に比定され、山田水呑遺跡など奈良・平安時代の大規模な集落遺跡が存在し、すべてではないにしろ中原窯跡の製品と思われる「土師質須恵器」といった杯が9世紀中頃の住居跡から多数出土している。また、久我台遺跡からは、杯の底部に特徴的な重ね焼きの痕跡の事例が報告されているが、同様の痕跡をもった杯が今回の調査でも出土しており、やはり中原窯跡の製品と考えられる。国の領域までも越えて製品が供給されていたということは、中原窯跡の成立や経営の基盤を考察していくうえで重要な事実である。

今後は調査例の増加や、これまで調査した遺跡の再検討を踏まえ、胎土分析の結果なども援用することにより、中原窯跡の製品のより綿密な供給関係を明らかにしていく必要があろう。

4. 結語

今回の調査で得られた成果は以上のとおりである。確認調査という限られた範囲と期間であったため、中原窯跡の全容を解明するに至らなかったことは言うまでもない。しかし、これまで判然としなかった窯体の一端が判明したことや、皿・羽釜などの器種が新たに出土したことは、今後の集落遺跡などの調査・研究に重要な資料を提供できたと考える。

中原窯跡の位置している台地は、旧石器時代の剥片から中世のかわらけまで出土し、窯跡のみならず、各時代に及ぶ複合的な文化相を内包していることが明らかとなった。保存をまず第1に考えるべきであるが、将来調査を行う場合は、以上のような要素を十分に踏まえ、総合的な調査体制でのぞむことが必要であろう。

参考文献

- 天野 努 1974 『八千代市村上遺跡群』 千葉県都市公社
- 天野 努他 1989 「古代集落と墨書き土器」『国立歴史民俗博物館研究報告』第22集 国立歴史民俗博物館
- 茨城県立歴史館 1986 『茨城の須恵器窯—窯跡にみる古代土器の生産と供給—』
- 宇津川 徹 1983 「窯跡から出土した須恵器（胎土）の鉱物学的分析について」『貝塚博物館紀要』第10号 千葉市加曾利貝塚博物館
- 宇野隆夫他 1989 『越中上末窯』 富山大学人文学部考古学研究室
- 小沢 洋 1985 『境遺跡』 君津都市文化財センター
- 奥田正彦 1988 『市原市石川須恵器窯跡確認調査報告書』 千葉県文化財センター
- 加藤 修他 1987 「Na513遺跡」「多摩ニュータウン遺跡」昭和60年度 東京都埋蔵文化財センター
- 倉田義広 1983 「千葉市内の平安時代窯跡について」『貝塚博物館紀要』第10号 千葉市加曾利貝塚博物館
- 倉田義広 1987 「下総の須恵器窯」「房総における歴史時代土器の研究」 房総歴史考古学研究会
- 阪田正一他 1975 『千葉東南部ニュータウン3—有吉遺跡（第1次）—』 千葉県文化財センター
- 佐久間 豊 1986 「房総をめぐる奈良・平安時代土器生産体制の展開に関する諸問題」『研究紀要』10 千葉県文化財センター
- 佐久間 豊 1989 『木更津市上名主ヶ谷窯跡確認調査報告書』 千葉県文化財センター
- 須田 勉他 1986 「窯業」『千葉県生産遺跡分布調査報告書』 千葉県教育委員会
- 杉本 宏他 1983 『隼上り瓦窯跡発掘調査概報』宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第3集 宇治市教育委員会
- 関口達彦 1987 「千葉市高沢遺跡」「房総における歴史時代土器の研究」 房総歴史考古学研究会
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店
- 千葉県教育委員会 1986 『千葉県埋蔵文化財分布地図（2）』
- 根本康弘 1983 『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書6 木葉下遺跡I（窯跡）』 茨城県教育財団
- 萩原恭一他 1986 『東金市久我台遺跡』 千葉県文化財センター
- 松村恵司他 1977 『山田水呑遺跡』 山田遺跡調査会
- 三辻利一 1984 「千葉県内出土須恵器・埴輪・瓦の胎土分析」『研究紀要』8 千葉県文化財センター

第1表 土器観察表

2号窓跡(第7図、図版8)

番号	器種、型式	法 量			遺 存 度	胎 土	燒成	色 調	備 考
		口 径	器 高	底 径					
1	杯 I群	13.2	4.6	6.5	1/2	長石粒、スコリア(赤色)	良	茶褐色	
2	高台付皿	-	2.1	底谷深 (6.6)	1/3	スコリア(微細)	普通	明褐色～明茶褐色	
3	粗面盤	(10.4)	2.9	-	口縁1/5	石英粒	*	明褐色	
4	小型盤	-	9.6	5.9	口縁欠損	長石粒、石英粒	良	明褐色	
5	壺A	(28.8)	15.6	-	1/3	長石粒、石英粒	良	暗灰色	
6	壺	30.0	29.9	(15.0)	2/5	長石粒	普通	暗灰色	
7	壺B	(41.0)	10.5	-	1/6	スコリア(赤色) 石英粒、長石粒	良	茶褐色	

10トレンチ灰原A(第11、12図・図版6、8)

1	杯 I群	(12.7)	3.7	7.0	3/5	石英粒、長石粒	普通	赤褐色～灰色	底部外面に「万」の繊維
2	*	12.2	3.6	7.0	完形	石英粒	焼きすぎ	灰色～明赤褐色	
3	*	12.2	4.0	7.1	3/5	スコリア(黒色)	やや不良	明灰褐色～灰色	
4	*	12.3	3.9	7.0	一部欠損	石英粒	*	茶褐色～灰色	
5	*	12.3	4.0	6.5	2/3	石英粒、長石粒	良	暗灰色	
6	*	12.4	3.6	6.4	3/5	長石粒	普通	灰色	
7	*	12.5	4.4	6.2	2/3	石英粒、長石粒	*	暗灰色	
8	*	12.8	4.0	6.5	3/5	*	*	*	
9	*	12.2	3.4	7.0	完形	石英粒	*	灰色	
10	*	12.4	3.8	7.5	口縁の 一部欠損	*	良	明赤褐色～暗赤褐色	焼きすぎ
11	*	(12.5)	3.95	7.6	1/3	石英粒、長石粒	やや不良	明灰茶褐色～明灰色	
12	*	(12.5)	3.5	7.0	1/4	石英粒	良	灰色	
13	*	12.4	3.7	7.2	2/5	*	普通	明灰色～灰褐色	
14	*	12.4	3.7	7.5	完形	*	*	灰色	
15	*	(12.6)	3.7	(7.2)	2/5	*	やや不良	褐色～灰色	
16	*	(13.1)	3.8	7.2	1/2	*	*	明灰色～褐色	
17	*	12.9	3.9	7.4	口縁の 一部欠損	*	*	褐色(くすんでいる)	
18	*	13.2	4.0	7.3	完形	*	良	灰色	
19	*	13.6	4.4	7.3	3/5	スコリア、石英粒	*	明褐色～灰色	
20	*	(14.0)	4.35	7.9	1/4	石英粒	普通	明灰褐色	
21	Ⅲ群	(12.0)	3.9	6.7	1/2	*	良	黑色	
22	*	(13.4)	4.0	7.6	1/2	石英粒	良	黑色	
23	*	13.5	4.2	(8.2)	口縁の 一部欠損	*	*	暗赤褐色～黒色	
24	Ⅲ群	13.8	3.7	7.3	口縁の 一部欠損	*	*	くすんだ暗茶褐色	
25	盤	(15.6)	1.6	(6.2)	1/5	*	普通	灰色	
26	*	(14.4)	1.9	(6.2)	1/5	*	*	暗灰色	
27	壺B	(19.4)	7.7	-	D縁の1/3	*	*	灰褐色	
28	*	(22.0)	13.2	-	口縁1/2	*	*	黑色	
29	壺	(28.0)	13.8	-	口縁1/4	石英粒、スコリア	良	茶褐色	
30	壺A	(24.6)	7.3	-	口縁1/3	石英粒	*	灰色	
31	大壺	(43.0)	10.5	-	口縁1/3	長石粒	*	*	
32	*	(46.6)	6.3	-	口縁1/3	石英粒	*	*	

10トレンチ灰原B(第13、14図・図版7、8)

1	杯 I群	(12.8)	4.6	7.0	1/3	石英粒、黒色土粒	良	灰色	
2	*	12.6	3.9	6.6	3/4	石英粒	*	*	
3	*	12.6	4.2	7.0	2/3	*	普通	灰色(一部褐色)	
4	*	12.7	4.4	6.6	1/3	*	良	灰色	
5	*	12.7	4.4	6.6	3/5	*	*	*	
6	*	(12.8)	3.5	7.2	1/3	*	*	暗灰色	
7	*	(12.8)	3.9	7.4	1/5	*	*	灰色	
8	*	(12.4)	3.8	8.1	2/5	*	*	*	
9	*	(13.2)	4.1	7.1	1/5	*	*	*(内部は褐色)	
10	*	13.1	4~4.3	7.2	口縁欠損	*	普通	灰色	
11	*	13.2	4.4	7.2	2/3	*	やや不良	茶褐色～灰色	

12	杯	I群	13.2	4.8	(7.6)	1/3	石英粒	普通	灰色	
13	"	"	13.8	8.2~4.3	7.3	2/3	長英粒	良	暗灰色	
14	"	"	13.9	3.7	7.4	2/3	石英粒	好	好	
15	"	"	(13.7)	3.9	7.0	2/5	"	"	灰色	
16	"	II群	12.3	4.4	7.0	1/4	"	"	黑色	
17	"	"	12.4	4.0	6.7	3/5	スコリア	好	好	
18	"	"	(12.6)	4.2	7.4	1/2	"	やや不良	暗褐色	
19	"	Ⅲ群	12.8	4.3	7.1	2/3	"	良	褐色	
20	"	"	13.4	4.0	7.6	口縫の 二層交換	小礫	好	好	
21	"	"	13.3	4.4	7.6	4/5	石英粒	普通	暗褐色	
22	"	"	-	-	-	底部片	石英粒、長石粒	良	赤褐色	底部内面に「ム」の繊維
23	高台付皿	(14.8)	3.1	高台(深0)	1/3	"	"	"	暗灰色	
24	壺B	(22.8)	8.5	-	1/3	石英粒、長石粒、スコリア	好	明灰褐色		
25	"	21.0	11.9	-	口縫以下 二層交換	長石粒	普通	灰色		
26	"	22.7	13.4	-	"	"	好	好		
27	"	(23.2)	13.2	-	1/3	石英粒、長石粒	好	暗赤褐色～暗褐色		口縫内面にカマハラXJ
28	"	(22.9)	11.6	-	口縫底1/3	石英粒	良	暗茶色～濃茶色		
29	"	(23.8)	22.5	-	口縫～ 中位	"	やや不良	灰褐色		
30	壺A	31.2	19.5	-	1/2周	長石粒	良	暗灰色		
31	瓶	32.2	19.7	-	"	石英粒	やや不良	暗赤褐色～暗褐色		

各トレンチ出工 (第16、17図・図版9)

1	杯	Ⅲ群	(12.0)	4.2	6.4	2/5	長石粒、スコリア(赤色)	良	明褐色	第1トレンチ	
2	"	"	(12.9)	3.8	7.1	1/3	" (黒色)	好	明褐色	好	
3	"	"	(14.6)	4.3	6.8	1/3	"	普通	暗褐色	好	
4	"	I群	(12.4)	3.6	6.8	1/3周	石英粒	良	灰色(内部は褐色)	第2トレンチ	
5	"	"	(13.0)	3.85	6.9	1/4周	石英粒、長石粒	普通	灰色～赤褐色	好	
6	"	"	13.5	4.1	6.6	1/2	石英粒、スコリア(黒色)	好	灰茶褐色	好	
7	"	"	(13.4)	4.3	(7.6)	1/3周 二層交換	石英粒、長石粒	好	暗褐色	好	
8	"	Ⅲ群	12.3	3.9	7.2	2/3	石英粒	良	暗褐色	好	
9	"	"	(13.1)	3.8	6.6	1/4周	石英粒、スコリア	普通	暗赤褐色～暗茶褐色	好	
10	"	"	(13.4)	4.0	7.3	1/3周	"	好	暗茶褐色	好	
11	"	"	11.5	3.5	6.0	口縫の 二層交換	スコリア	やや不良	明褐色～明灰褐色	好	
12	"	"	11.5	3.6	6.1	"	スコリア、石英粒	好	好	好	
13	"	I群	(12.4)	4.5	5.8	1/5	長石粒、石英粒	良	暗灰色	第3トレンチ	
14	"	"	(12.4)	3.5	(7.0)	1/4	"	好	暗褐色	第11トレンチ	
15	"	Ⅲ群	(11.9)	3.4	6.4	1/4周	石英粒、スコリア(赤色)	普通	暗茶褐色～黒色	好	
16	"	"	(12.2)	4.7	7.2	1/3	石英粒、長石粒	好	黑色	好	
17	"	"	(12.9)	3.9	5.8	1/5	石英粒、スコリア(赤色)	好	暗灰色	好	
18	"	"	(13.5)	3.8	6.8	1/4周	"	好	暗茶褐色	好	
19	"	"	(14.2)	4.1	(7.6)	1/4	"	好	褐色～暗褐色	好	
20	蓋	(14.8)	2.95	-	1/3周	長石粒、スコリア(黒色)	良	赤褐色～灰色	第2トレンチ		
21	小型壺	(11.4)	3.5	-	1/5周	長石粒、石英粒	普通	灰色	好		
22	壺A	(27.8)	17.2	-	2/5周	石英粒、小礫	普通	暗灰色	第2トレンチ		
23	壺B	(21.0)	6.0	-	1/5周	石英粒、スコリア(黒色)	好	灰色(内部は褐色)	第3トレンチ		
24	"	"	35.5	15.0	-	2/3周	長石粒、石英粒	好	明褐色	第1トレンチ	
25	壺Aor壺B	-	1.6	12.6	底部	"	好	茶褐色	好	外側に「MUD」の繊維	

15トレンチ (第21図・図版9)

1	杯	(土筋部)	(11.1)	3.9	6.5	1/3周	スコリア(赤色)、長石粒	良	明褐色	
2	盤	(土筋部)	12.9	2.7	6.3	3/4	"	好	明茶褐色	
3	高台付皿(土筋部)	(13.5)	2.75	7.4	1/2周	スコリア(赤色)、石英粒、金雲母	好	好		
4	杯	Ⅲ群	12.7	4.3	6.1	2/3	スコリア(赤色)、長石粒	好	褐色	
5	"	"	13.3	4.7	7.6	3/5	スコリア(赤色)、石英粒、長石粒	普通	暗赤褐色～灰色	(内部は褐色)
6	"	"	14.0	4.3	6.6	3/5	スコリア(赤色)、石英粒、長石粒	好	暗褐色～暗茶褐色	
7	壺B	22.0	37.1	15.4	4/5	"	普通	暗褐色		
8	壺A	(33.0)	29.3	15.2	1/6周	長石粒、スコリア(赤色)	良	褐色		

写 真 図 版



中原窯跡と周辺の航空写真（昭和42年撮影・1/10,000）

図版 2



1. 調査前近景(西から)



2. 調査前近景(西から)



3. 調査前近景(南から)



1. 1号窯跡
窯尻(東から)



2. 1号窯跡
セクション(西から)



3. 1号窯跡
焚口付近(西から)

図版 4





1. 第10トレンチ灰原A
遺物出土状況（南から）



2. 第12トレンチ（西から）



3. 第15トレンチ
遺物出土状況（西から）

第10 トレンチ灰原A

図版 6



第10 トレンチ灰原B



図版 7

図版 8



2号窯跡-1



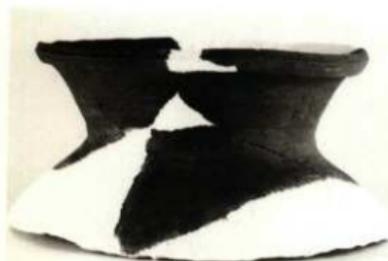
10A-22



2号窯跡-4



10A-23



10B-25



10B-21



10B-26



2号窯跡-6

図版 9



2-11



2-12



15-5



15-6



15-1



15-7



15-2

図版10



10A-1



10B-22



2-25



15



10-3



3-6



2-5



10-4



10-5



2-1



中原窯跡周辺地形図

0 50m

千葉県文化財センター調査報告第186集
千葉市中原窯跡確認調査報告書

平成2年3月31日発行

発 行 財団法人 千葉県文化財センター
千葉市葛城2丁目10番1号

印 刷 新 柳 印 刷 株 式 会 社
千葉市葛城1丁目8番1号

本報告書は、千葉県教育委員会の承認を得て
増刷したものです。